



Data

監督: トーマス・ステューバー
原作: クレメンス・マイヤー「通路にて」
出演: フランツ・ロゴフスキ/ザン
ドラ・ヒュラー/ペーター・
クルト/アンドレアス・レオ
ポルト/ミヒャエル・シュベ
ヒト/ラモナ・クンツェ=リ
ブノウ/ヘニング・ペカー/
マティアス・プレナー/ク
レメンス・マイヤー

■■■ショートコメント■■■

◆日本はバブルが崩壊した1989年1月8日に昭和から平成に移り、30年後の2019年5月1日に令和に移ったが、1989年11月9日に“ベルリンの壁”が崩壊したドイツの30年後の今は？

本作の舞台は、旧東ドイツの巨大なスーパーマーケット。東西ドイツの統合は望ましいことだったが、経済的に劣っていた東ドイツが西ドイツに吸収合併される形で併合されたから、旧東ドイツの人々（とりわけ労働者）は大変。

そんな状況下、東ドイツ出身の作家クレメンス・マイヤーの短編小説『通路にて』を、同じく東ドイツ出身の若手監督トーマス・ステューバーが映画化した本作は、キネマ旬報4月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」で3人の映画評論家が星5つ、4つ、4つと高評価している。しかし、残念ながら私はイマイチ・・・。

◆口下手な27歳の男クリスティアンを演じるフランツ・ロゴフスキは『未来を乗り換えた男』(18年)でも主人公を演じていたが、この彫りの深い個性的な顔立ちの俳優はどうみてもハリウッドの名優ホアキン・フェニックスそっくり。彼は演技力もなかなかのもので、本作で第68回アカデミー賞主演男優賞を受賞したそうだから、これからがたのしみだ。また、新米のクリスティアンにスーパーマーケット内でフォークリフトの扱いを教える先輩従業員ブルーノを演じるペーター・クルトも、クリスティアンが恋心を寄せる人妻マリオンを演じるザンドラ・ヒュラーも、演技力はなかなかのもの。

しかし、職場の色々な場所でタバコを吸いながら語り合うシーンが多い本作は、好きな人は好きなのだろうが、残念ながら私にはイマイチ・・・。

◆“働き方改革”が大きく進み、2019年の4月末から5月にかけては10連休を実現した日本は、今後良くも悪くも大きく変わる可能性がある。しかし、本作をみている限り、ドイツのこの大型スーパーマーケットでは、働き方の大きな改革はなさそうだ。本作には現場

で働く労働者しか登場せず、いわゆる管理職や経営者が全く登場しないので、この手の巨大スーパーマーケットの経営が2019年現在どのように成り立っているのかについてさっぱり分からない。しかし、私がみる限りもっともっと経営改善の余地がありそうだ。

ところが、本作の登場人物たちはもちろん、監督もそういう視点は全く持たず、ただ現実を受け入れる中で、ほとんど希望がないにもかかわらず、何とか希望を見出そうと懸命にもがいているだけ。私にはそう思えてしまうが、その点について、チラシには「はかなく密やかに、祝福のように ままならない人生にも、美しい瞬間がある」と書かれている。なるほど、本作を評価する批評家はそんな本作の描き方を高く評価するわけだが、残念ながら私にはイマイチ・・・。

2019（令和元）年5月13日記